

今月中旬、山形市で「山形国際ドキュメンタリー映画祭2025」が開催された。同市制施行100周年を記念して1989年に創設され、隔年開催で今回が第19回。今や東京国際映画祭と並び、日本を代表する国際映画祭として知られ、世界のドキュメンタリー制作者にとって「ヤマガタ」は最高の舞台の一つとなっている。今回はイスラエルによるパレスチナ自治区ガザへの攻撃が深刻な人道危機を招く中、特別企画「パレスティナーその土地の記憶」も催され、過去のガザ関連の作品などが上映された。参加者数は約2万2千人と過去最高だった。

「インターナショナル・コンペティション(IC)」とアジアに特化した「アジア千波万波」という二つのコンペティション部門には、合計で135の国・地域から2676本の応募があり、35作品が候補作に選ばれた。このうち、ギヨーム・カイヨー、ベン・ラッセル両監督による「ダイレクト・アクション」がICの大賞に輝くなど10作品が受賞した。

筆者は2007年の第10回以来、観客、審査員、そして学生を



竹林 紀雄

ヤマガタで世界と出会う

映像が自ら語る力こそ

引率する大学教員としてヤマガタに通い続けている。テレビに軸足を置いてきた筆者がなぜ足を運ぶのか。その理由は明快だ。ここで出会う作品には、ドキュメンタリーを定義に縛らない自由さと、映像そのものが語る面白さがある。それは日本のテレビドキュメンタリーにとっても示唆に富んでいる。

痛感してきたのは、ナレーションに頼りすぎる日本の映像表現である。ナレーションは物語を展開しやすくするが、現場のリアリティーやダイナミズムを弱めてしま



「ダイレクト・アクション」より＝山形国際ドキュメンタリー映画祭提供

う。ナレーションという鎖につながれた映像は従順だが、ヤマガタでは鎖を解かれた映像は野性味と自由に満ちていることを思い知らされた。筆者はこれまでも、審査をつとめるFNSドキュメンタリー大賞や文化庁芸術祭などの作品講評や新聞のコラムで同様の課題を指摘してきたが、近年、ナレーションや最小限の語りなど、表現の変化が顕著になりつつある。ヤマガタが果たした影響は決して小さくない。

また、この映画祭には国内外から映像を学ぶ学生たちが集う。「学生交流ナイト」など同世代の交流、さらに海外の著名監督と議論を交わす場も用意されている。教育的価値の高いことも特色だ。人気バラエティー番組のチーフディレクターとなった筆者の教え子

はこう語る。「学生時代にヤマガタで見た作品群には、演出を越えて現実そのものが持つ画力があつた」。その体験がいまの番組づくりの根底にあるという。

今回の大賞作「ダイレクト・アクション」は、環境破壊にあらがうフランスの人々の闘いを描く。活動家グループの牧歌的な暮らしが、やがて抵抗の現場と地続きであることを描き出す。カメラは移動せず、定点観測のような静謐な構図が続く。そして、長いワンカットで構成された映像が、現場に漂う空気まで見る者に伝える、異質の映像体験をもたらす。

また、チリの刑務所の女性受刑者がひそかに撮影したスマホ映像で構成される「愛しき人々」も印象深い。タナ・ヒルベルト監督は、この抹殺されつつな映像に永続性をもたせるために、すべての画像を紙焼きし再映像化した。縦長の画面で鉄格子の中の時間を可視化した表現は、愛を渴望する心情をいっそう鮮明にしていた。

ヤマガタは「ドキュメンタリーとは何か」を問い続けてきた。その探究は今回さらに深化し、より実験的な表現が増えた。ドキュメンタリーの未来を開くのは映像が自ら語る力を信じることだとヤマガタが教えてくれた。

(たけやし・のりお＝文教大学大学院教授、映像作家)